

ニコラウス・クザーヌスの人間観

——日本人の宗教性からみた——

坂本 堯

序

ニコラウス・クザーヌス (Nicolaus Cusanus, Nikolaus von Kues, 1401~1464) は、ドイツ・ルネッサンスが生んだ独特な思想家であった。いま、その宗教、哲学、社会、文化、自然を包括する雄大な思想の原点を求めるとすると、そこには個人としての人間を高く評価し、尊重し、その価値を實現させようと願う、クザーヌスの人間観が明らかとなる。

さて、このクザーヌスの人間観のもつ特徴は何かという点をとりあげると、第一に目につくことは、そのヨーロッパの性格であり、第二に目につくことは、そのキリスト教的性格である。このことは、クザーヌスが生れ、活躍した場所と時代の精神的、社会的、文化的状況からすれば当然のことといえよう。

当時、十五世紀の西ヨーロッパではキリスト教的中世思想がまだ強く支配していた。ただ、そこには、後世の西洋史家たちからルネッサンスと呼ばれる新しい思潮が起りつつあった。

これは、キリスト教のヨーロッパ支配によって次第に後退していったヨーロッパ本来の思想、すなわち、ギリシア・ローマの思想、学問、文化の復興であった。

この思想的状況のなかにあって、クザーヌスは、まず、伝統的なキリスト教の宗教と思想のなかに、自己の人間観の確固とした基礎を置いたのである。クザーヌスの人間観に著しい影響を与えたキリスト教思想家をあげると、アウグスティヌス、ブソイド・ディオニシウス・アレオパギタ、エックハルト、などが考えられる。

しかし、クザーヌスは伝統的な中世の人間観とは非常に異なっ

た人間観を創造し、それがヨーロッパの近代思想に多大な影響を与えに至った。

クザーンヌスの人間観は、個人とその良心を尊重し、宗教を異にする人々に宗教的寛容を示すという、「平和的人間観」を中心としており、この人間観は、現代ヨーロッパのヒューマニズムと民主主義思想の先駆ともいえるべきである。

さて、このクザーンヌスの人間観に似た人間観を世界思想史のなかに求めていくと、日本の思想史と宗教史のなかにそれが見られるように思われる。日本の宗教は、原則的に宗教的寛容を尊重して、他宗教に対して、自己の絶対性を強調することは少なかった。クザーンヌスの如く、他の宗教に対して、寛容を示す思想的態度を示すことは、キリスト教、ユダヤ教、回教のごとき絶対的宗教の立場からは原理的に不可能に近い。従って、クザーンヌスの如き思想家は、キリスト教においては稀であるといってもよい。いかにして、このような対異教的態度をクザーンヌスはとることができたであろうか。この問題の解決にとって重要なのが、クザーンヌスの人間観である。

かれは、人間観を新たにするために、まず人間の精神とその認識の研究を始めた。しかも、社会のなかにおける人間関係の歴史的研究がその端緒となった。カトリック教会という宗教的社会的なかでの長い歴史にあらわれる人間の現象を「和合」(concordantia) という観点から把えて、クザーンヌスは大著『カトリック的

和合について』(De concordantia catholica)をあらわし、次に『知ある無知』(De doctia ignorantia)のなかでは、その社会的一致の単位である人間の精神の本質を「対立物の一致」(coincidentia oppositorum)の原理で示した。

ここから、対異教徒に対する寛容の精神が主張される『信仰の平和について』(De pace fidei)の著作が次第に可能となるのである。

このようなクザーンヌスの思想的活動は、今日の世界の思想史的状况において、特に重要になってきたように思われる。なぜなら世界は今日、社会的文化的に密接に結ばれて、思想的対立は益々激化する様相を呈しており、思想的寛容と相互理解が、今より大切な時はないかと思われるからである。

従って、本論ではクザーンヌスの人間観を次の諸点について考察したいと思う。

- 一 クザーンヌスの人間観における哲学的、神学的基礎
- 二 クザーンヌスの平和的人間観
- 三 対立者の一致の原理
- 四 クザーンヌスの人間観と日本人の思想的特質

一 クザーンヌスの人間観における
哲学的、神学的基礎

クザーンヌスは当時の分裂した社会の中であって「カトリック的

和合」をもたらし、社会のなかに平和と一致を建設するように公會議において活動した。

そのなかで、アリストテレス・トミズムによって支えられた世のキリスト教社会の統一が解体と分裂の危機にあることを悟った。

いまや、教皇と皇帝という宗教と世俗の最も高い権威も、その統一を維持することはできなくなった。その統一を支える思想的根拠が、高まりつつあったルネッサンスの思想によって動揺してきたのである。

従って、クザーヌスは旧来のスコラ哲学やスコラ神学によらない新しい哲学神学を「カトリック的和合」のために追求した。こうして、『カトリック的和合について』の大著が書かれたのである。

クザーヌスはアリストテレス主義に対して新しい思想を見いだすために、まず、プラトン主義に注目した。当時、イタリアではピコ・デラ・ミランダラとマルシイリオ・フィチーノなどが同じようにプラトン思想に傾倒していた。

クザーヌスのイタリア留学中は、パドヴァ大学で法学を学ぶと共に、その地の人文主義者達と交友を結び、パウロ・デル・ポツツオ・トスカネリとは生涯に亘る親友となった。

クザーヌスが主として法学を当時学んだことから、かれの哲学と神学には社会と人間に関する思索が中心となった。こうして、

クザーヌスの人間観は、キリスト教神学の伝統と人間を發見し、その価値を守るルネッサンスの思想を綜合してきたのである。

E・モイテンは、この点について、

「民主主義的多元論的原理——それは社会秩序をもちや、階層的制度的なピラミッドの統一の中に構築するものではなかった。——それが、発言権を求めつつあった、もちろん遙か後になって漸く、ひとはこの原理に時代の将来を托そうとしたのではあるが。この(民主主義的多元論的)原理は、万人が平等であり、等しい権利と等しい尊厳をもつという思想——

それは自然法によって与えられており、ストア思想の富がキリスト教の伝統のなかでも世々持ち運んでいた思想である。

——から出發してはいるが、それが政治理論の歴史においてはじめて実際の形式にまで具体化されたのは、あの同意の原則、即ち統治されるすべての者が彼らの支配者およびこの支配者がつくる政府に同意を与え得ねばならぬ、という原則においてなのである。もしもひとがクザーヌスの根本問題を探り出そうと思うなら、ここで彼に次のような問いを忌憚なく呈することが出来るであろう——多勢の者の、即ちライプニッツが名付けた所では『諸々の小無限』のその権利は、或る統一的な關係のなかではいかに把握されるべきものであるのか。諸々の小宇宙は大宇宙のなかにどのような仕方であるのか。——この根本問題の生み出す緊張は、神学者としての或いは

政治理論家としてのクザリヌスを……中略……哲学者クザリヌスをも奔命に疲れさせた。この緊張を解きほぐし、それを、一致すなわち『和合』をば包括的に理解することにおいて克服しようという試みは、彼がその最初の名著に与えた表題の中に最も雄弁に言いあらわされている。即ち「普遍的^{ユニバーサル}的和合^{ハモニア}」という表題は彼の生涯のプログラムを意味しているのである。」

と述べてクザリヌスの人間観の核心を説明している。

さて、クザリヌスの人間観の哲学的基礎を簡単にまとめると述べるとすれば次のようになる。

クザリヌスは自然法から出発し、統治される者が、かれらの支配者とその政府に同意を与えねばならないという「同意の原理」および、統治されるものは自由な選挙によって代表者を選び、自己の意志を統治に反映させることができる「代表の原理」を主張する。

ところで、カトリック教会という宗教的社会にあっては階層的秩序であるヒエラルキーを認めるという伝統に立つクザリヌスは、前述の民主主義的社会理念と伝統的ヒエラルキー思想の対立に悩み、その統一と総合に努力するのであるが、当時のキリスト教社会の統治者と民衆の政治思想的未成熟のために、現実の政治世界ではこの両者を統一するという理想を達成することはできなかった。かつてプラトンが理想的政治の実現に失敗して、哲学者の悲劇を味わったのをクザリヌスも体験したのである。

こうして、クザリヌスは伝統的ヒエラルキーに支配された教会の現実と妥協し、教会の平和と和合の再建のために教皇派に協力するようになった。しかし、他方では、かれの精神のなかに確立していた民主主義の同意と代表の原理は哲学的・神学的に探究され、晩年には『信仰の平和について』の他民族の同意と代表を尊重するという思想となって開花するのである。

このクザリヌスの一貫した民主主義的人間観を研究したのが拙論『ニコラウス・クザリヌスにおける人間の尊厳』であって、ここで、人間は「小宇宙と世界」⁽¹⁰⁾、「高貴な王国」⁽¹¹⁾、「高貴な肉体」⁽¹²⁾、「卓越した知性」⁽¹³⁾、「高貴な自由」⁽¹⁴⁾、「高貴な精神」⁽¹⁵⁾、「貴賤すべきもの」⁽¹⁶⁾、「高められた本性」⁽¹⁷⁾、「自然的目的」⁽¹⁸⁾、「高貴な動物」⁽¹⁹⁾、「完全な動物」⁽²⁰⁾、「動物全体の上にあるもの」⁽²¹⁾として、クザリヌスによって示されていることが証明されている。

特に注目すべきことは、クザリヌスの人間観では、個人としての人間の価値を高く主張していることである。このことは「個別化の原理」の考え方に明らかであって、クザリヌスの個別化の原理は、トマス主義者がそれを「限定された資料」(materia signata)という質料的原理におくのに対し、「神の一性への参与」という原理におかれる。こうして、クザリヌスの個別化の原理は神学的に説明され、「神の似姿」⁽²²⁾としての人間のもつ極めて高い個別性が明らかとなり、個別的人間の尊厳が確立するのである。この点において、クザリヌスのルネッサンス的態度が明らかとな

り、ヨーロッパの近代と現代の社会の民主主義へ与えた彼の影響の大きさが理解されるのである。

二 クザールヌスの平和的人間観

クザールヌスによれば、人間個人のもつ存在価値を守り、その存在目的に一人一人の人間を到達せしめるための不可欠の条件は社会の平和とそれを生み出す人間精神の寛容である。

クザールヌスが主張する平和の概念は、それなくしては事物そのものの意義も存在も失われてしまう程、すべての事物にとって重要なものである。⁽²³⁾

かれの平和的人間観は人間内部の平和と人間外部の平和の両側面から考察されている。前者は人間の肉体と精神の間の調和、理性的本性と動物的本性の間の調和統一を意味しており、後者は人間相互の間の平和、団体と団体の間の平和を意味している。

ところで、クザールヌスの時代はこの双方において人間の持つべき平和は危機に瀕していた。特に、宗教団体の間の平和は崩壊していた。従って、クザールヌスの平和的人間観においては、宗教団体の間の平和が強調される。この具体的実現のためには、それぞれの宗教団体を構成する人間が「宗教的寛容」の精神を体得することが必要であり、これはクザールヌスの理想とする人間観の重要な要素である。

さらに、このクザールヌスの「宗教的寛容」を分析すると「個人

の良心の權威と自由」と「知ある無知」がその思想的基礎をなしていることが明らかとなる。すなわち、個人の良心の声は、その個人にとっては神の声として受けとられ、個人に個々の行為の倫理的妥当性を教える。こうして、個人は自己の良心に従うという絶対的權利と義務をもち、良心に従う限り他の束縛をうけることなく自由である。また、宗教的真理は人間の理性を越える絶対者、無限者を対象にするので、知ある無知の道でしか到達することはできない。しかも、この道は少数の優れた宗教指導者にしか確実に辿れないので、多くの人々は、それぞれの時間的、空間的な制限のなかで、その宗教指導者を教祖として仰ぎ、宗教団体を形成して宗教真理への道を歩むのである。以上のことから次の宗教寛容論をクザールヌスは主張する。第一に、個人が良心に従って信ずる宗教は認められるべきであり、何人も宗教迫害を行ってはならない。また、何人にも宗教の自由が与えられねばならない。第二に、他の宗教を信する人々に対して、愛と寛容を示すべきである。第三に、宗派間の祭儀や習慣の相違は民族の伝統によって存在するのが自然であり、人は、相違する祭儀の奥に、共通の神性を認め礼拝していることを理解すべきである。

クザールヌスはこのような平和的人間観によって、人間社会での信仰の平和と宗教寛容論を述べたが、かれのこの理念は当時のキリスト教会では受け入れられず、傷心のうちに病死したことは遺憾なことであった。⁽²⁴⁾

三 対立者の一致の原理

クザールヌスの人間観を特徴づける最大の原理は「対立者の一致」の原理である。この原理は事物をも含めた原理として理解されるときは「対立物の一致」と訳される。

さて、クザールヌスは個人の価値を尊重する新しい人間観を主張するにあたって、古代と中世の個人の価値を軽視するギリシア・ローマの奴隷制度、人間差別の原因となった人間観を強く批判する必要がある。これは、アリストテレス主義となってクザールヌスの時代に強い影響を与えていた社会思想、人間観に対抗する新しい人間観の原理を要求することとなった。これが「対立者の一致」の原理である。

この原理はアリストテレスの主張する矛盾律の原理を超越するものである。アリストテレスは形相と質料、現実態と可能態などの対立する二者の綜合を教えるが、これは人間観に適用するときには強者対弱者、与える側と与えられる側との関係として、クザールヌスには力による人間関係の説明になると思われた。

それに対し、クザールヌスは人間関係の基礎として三位一体の神の本性を原理とした。この神における三つのペルソナの一致は、あらゆる人間の認識を超えるものであって、人間の理性には矛盾のごとく思われる対立でも一致させる程の最も高い一致である。

もはや、如何なる一致も存在し得ないような宗教的対立、善と

悪の対立、信仰と理性の対立、個人と社会の対立、正義と愛の対立、円形と多角形の対立、光と闇との対立にも一致の可能性を見つけ、一致を実現するような無限の力による一致が「対立者の一致」の原理によって行われるのである。

クザールヌスによれば人間が生存していくためには、このような無限の対立をも一致せしめるような精神的エネルギーが必要である。この一致の最高のエネルギーは無限なる三位一体の神である。無限なる神はあらゆる人間の論理を超越した存在であると共に表現しえない方法で人間の存在と論理の原理となっている。従って、人間は神の似姿であるという点で、神の「対立物の一致」の原理に与っている。こうして、人間は神に近づくほど、対立するものを一致させる力を神から与えられる。これが、理性を越えた、信仰と愛の道である。この点からクザールヌスの対立者の一致の原理を考えると、超論理的、神秘的、宗教的であり、実践生活に即したものであることができる。

四 クザールヌスの人間観と日本人の思想的特質

クザールヌスの人間観は西欧の思想史から見ると、すでに述べたような平和思想と宗教寛容、および「対立物の一致」のような超論理的な思想によって、特異なものである。このようなクザールヌスの思想を日本の思想における特質と比較すると、両者の類似性が明らかになると共に、東西両思想の出合いという面でのクザール

ヌスの人間観の意義が明白となる。

(1) 日本人の宗教寛容と相対主義的神観⁽²⁶⁾

絶対的宗教を信じ唯一神教を奉ずるキリスト教と異なり、本来日本人の宗教は相対的であり多神教である。日本人の伝統的宗教心からすれば多くの神々が共存していることは当然であるが、このような神概念は絶対的宗教の立場とは根本的に相違している。また、キリスト教の神は唯一絶対であると共に創造神であるに對し、日本の神々は無からの万物の創造というようなことは無関係の自然神である。

ところで、このような日本人の神観は徹底した宗教寛容と重層信仰を可能にしている。

なぜなら、多くの神々が存在し、それぞれの神が独自の超越性と能力を有しており、人間に恩恵を与えているのであるから、人間は多くの神々を礼拝できるし、また、異なった神を礼拝する人間に對して理解と寛容を示すべきことは当然であるからである。

こうして、日本人の宗教観は徹底的に相対主義といえるが、これは絶対的宗教の立場からは許すことのできない誤謬であり、この点からキリスト教やユダヤ教は他の宗教に對し寛容な態度を取ることではできなかった。

クザールヌスはその宗教平和論において、多神教徒に對する寛容を正当化するために、神性と神の名前とを区別することを教えた。神を示す名前が人間の言葉による多様性をもつとしても、神性に

おいて同一の神性を認め礼拝しているのが多神教であるとするのである。

もちろん、このような神概念、宗教思想は「知ある無知」、「對立物の一致」という原理を前提としているが、これが汎神論的傾向をもち、相対主義的な異端思想として、クザールヌスは批判され、訴えられたことは歴史的な事実として記録されている。⁽²⁶⁾

(2) 人間中心主義

キリスト教の概念にはユダヤ教にある絶対神を中心とする神中心主義が明らかであるが、日本の宗教思想に強いのは人間中心主義である。前述の一人一人の神認識を認めその価値に従う宗教生活を評価する宗教寛容も人間中心主義の一側面であるといえるが、さらに神概念そのものが人間的であり内在的である。

神々は祖先崇拜の対象でもあり、祖先の土地に結びついたものである。宗教によって目ざすものは「現世利益」であり、人々は神々に五穀豊穡、無病息災、庇護と援助を求めて祈るのが日本の宗教の中心である。現世の利益をもたらずものは祖先の霊のみでなく、どのような超越者も神々として祭るのが日本人の宗教心であり、また現世の利益を妨げ「たたり」をなす靈を慰めるために神社仏閣を建てて祈るのが日本人の宗教行為であった。

仏教が伝来してからは、宗教のもたらす利益はもつと精神的な内的なものに変わった。仏教によって、日本人は自己の靈魂の救いを悟りに求めた。仏教的悟りによって煩惱と苦惱から解放される

人間観を日本人は得たが、これは、やはり、人間個人の救いと精神的利益を求める人間中心主義のより高次の形態ということができるであろう。

とくに仏教が四諦をその法門の根底においたことよって、日本人の人間観が深さをもちえたことは、ヨーロッパ人がキリスト教の伝来と受容によってその宗教的人間観を高めたことと似ているといえよう。

(3) 超論理的精神と実践重視の人間観

西欧の精神的特質が論理性にあるに對して日本人のそれは超論理性にあるといえよう。日本人の精神史を見ると形而上学的な活動において論理を追求するよりも、直観的で象徴的な思考を重視して来たことは明らかである。

この思考は道元禪師の『正法眼蔵』に見られるような日本仏教の「矛盾の相即」の思想のなかにあると思われ⁽²⁷⁾る。

このような論理の超越によつて、日本人の精神は強烈な実践重視の態度をとることができた。これはクザーヌスが「知ある無知」と「対立物の一致」の原理によつて、煩瑣哲学とよばれた論理主義に墮したスコラ哲学神学を超越して、実践を中心とする哲学や神学に移つていったのと類似しているといえよう。

この点においても仏教が日本人の人間観に与えた影響は極めて大きなものがあるといえる。

こうして、日本の精神史においてはクザーヌスがヨーロッパの

伝統的な思想や哲学に對して加えた批判と精神的改革が、仏教という従来の思想とあいまって、日本人の精神の中に形成されることとなつたのである。

結語

日本の思想的特質はその人間中心の人間観のなかにあり、西欧の人間観とは異なっている点が多い。しかも、その長所は超論理的で、他の宗教に對する寛容と平和の思想のなかにある。また、その基本的態度は異文化に對する受容と融合の態度である。

此に對し西欧の思想は論理主義、絶対主義を中心とし、非寛容で対決的である。しかし、クザーヌスは、実践における体験から、この西欧精神の欠陥を悟り、それを超越するために新しい原理を追求し、それによつて、すでに述べたような「平和と和合」の人間観を教えた。

今日、世界は一つになり、西欧文化と東洋の文化とは近接融合し、東洋の思想と西欧の思想は一つの世界の思想に結合すべき必要がある。これが、現代世界の平和のために不可欠の前提であるように思われる。この点において、クザーヌスの人間観の価値は極めて大きな意義をもっていると思われる。今後のクザーヌス思想の研究の成果が期待される。

(一) Nicolaus Cusanus, Nikolaus von Kues : De concordantia catholica, 1433

- (2) Nicolaus Cusanus : De docta ignorantia, 1440
 (3) Nicolaus Cusanus : De pace fidei, 1453
 (4) Meuthen, E. (福井修訳) 『ニコラウス・クザーヌス』法律文化社、昭和四九年、三六一—五〇頁参照
 (5) Giovanni Pico della Mirandola (1463—94)
 (6) Marsilio Ficino (1433—99)
 (7) Paolo del Pozzo Toscanelli
 (8) Meuthen, E. 前掲書、四一—四二頁
 (9) Sakamoto, P. T. : Die Würde des Menschen bei Nikolaus von Kues, Düsseldorf 1967
 (10) 同書、一三—一六頁 (homo microcosmos)
 (11) 同書、一七頁 (homo regnum nobile)
 (12) 同書、一七—一八頁 (homo corpus nobile)
 (13) 同書、一八—二〇頁 (homo intellectus excellens)
 (14) 同書、二一—二四頁 (homo libertas nobilis)
 (15) 同書、二四—二五頁 (homo spiritus nobilis)
 (16) 同書、二六頁 (homo honorandus)
 (17) 同書、二七頁 (homo natura elevata)
 (18) 同書、二八頁 (homo finis naturae)
 (19) 同書、三一—三三頁 (homo animal nobile)
 (20) 同書、三三—三六頁 (homo animal perfectum)
 (21) 同書、三六—三九頁 (homo supra omnia animalia)
 (22) 同書、四一—四三頁参照
 (23) Nicolaus Cusanus : "Deus in loco sancto suo (Utrecht 1451) ; Pax hominibus bonae voluntatis (Brixen 1454)
 (24) Meuthen, E. 前掲書、一一九—一二頁参照
 (25) 坂本莞『カトリックと日本人』一一九—一二二頁参照
 (26) Meuthen, E. 前掲書、六七頁参照

(27) 本多正昭『比較思想序説』六一—六五頁参照
 (さかもと・たかし、人間学・キリスト教思想史、

聖マリアンナ医科大学教授)